

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 山蔦真之

本論文は、「尊敬の感情」概念を中心にカント倫理学の文献学的解釈を試みたものである。論攷は大きく三つの部分に分かれており、第一、二章がカント倫理学の発展史を辿り、第三、四、五章が『道徳形而上学の基礎づけ』と『実践理性批判』に見られる倫理学体系を再構築し、第六、七章においては、構築された倫理学がそれぞれ、「道徳的悪」と「道徳的帰責」という問題へと適用されていく過程が描かれている。

その際、あらゆる章の導きの糸となっているのが、「尊敬の感情」という、「理性が引き起こす感情」である。さらに、本論考は単に「尊敬の感情」というカント倫理学の一概念を諸テキスト内に辿ったというだけのものではない。それは、当の概念がまさしくカント倫理学の中心を形作っている、というテーゼを提示する考察にほかならない。

「尊敬の感情」という問題設定それ自体は、現下のカント倫理学研究の一係争点に則ったものである。折しも、本論文が完成した同時期に、ドイツのカント協会からこの概念を扱ったモノグラフィーが出版されたように、尊敬の感情と、それがカント倫理学において果たしている「道徳的動機」という役割については、近年多くの研究が発表されている。本論考も、一方ではテキストの着実な読みに基づき、他方では先行研究を十分に咀嚼しながら議論を構築している。論文中で展開される、カント倫理学の発展史、『道徳形而上学の基礎づけ』と『実践理性批判』のテキスト解釈、さらに「道徳的悪」と「道徳的帰責」の考察等、すべての論点に関して、独断的なテキスト解釈を行わず、慎重にこれまでの研究の積み重ねに目を向けたことは、論文全体の最大のメリットの一つとして挙げられてよいであろう。

しかしそれと同時に、本論文は見逃しがたいオリジナリティを含んでいる。尊敬の感情がカント研究において注目を受けるようになったとはいえ、尊敬の概念をカント倫理学の中心に据えようとする先行研究はほぼ皆無である。本論文は、上記の諸論点の議論を通じてそのような結論を説得的に提示している。またそれと同時に本論文は、倫理学における理性と感情、あるいは道徳的決定における感情の役割という、より大きな問題をめぐり、一箇の独創的な思考でもあるとあってよい。

本論文は、このように、カントにおける「純粹感情」すなわち尊敬の感情の倫理学を、研究史上の論点、テキスト解釈上の細部との双方を踏まえて展開したものである。個々の論点にはなお展開を要する部分も残しているとはいえ、本論文は、一方ではカント研究の新たな礎を築き、他方で倫理学研究それ自体への斬新な視角を提起している。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。